

ねじりはちまき

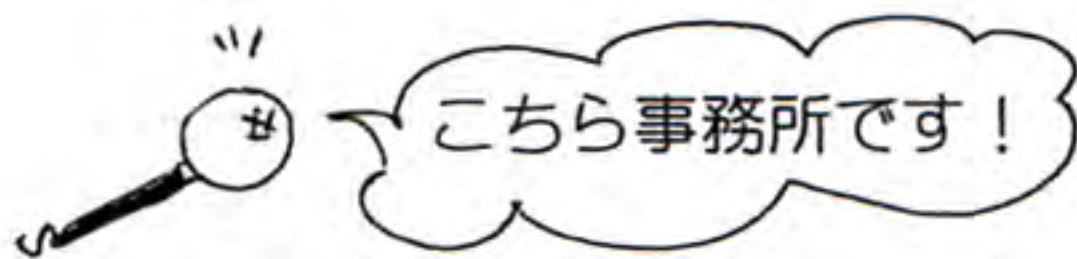
10月 神無月 寒露 霜降の月です。
10月1日衣替え、8日寒露です。10日体育の日、20日えびす講、
霜降は20日です。

暑い夏も終わり、いよいよ秋がしのび寄って来ています。
秋の天候は変わりやすく、3日～4日周期で雨が降り雨量も多い時期です。
高気圧になると、雨によって洗い流された大気に、乾燥した冷気が流れ込んで
空気が澄み、日差しがまぶしくさわやかな晴天になるのですね。

変わりやすい秋の空に秋晴れが続くようになるのは、晩秋の時期です。
秋日和には家族揃って出かけるのも良いのですが、おいしい食材も豊富で
馬肥ゆる秋を理由に食べ過ぎには十分注意をしたいと思います。
それに朝晩の冷気も加わります。
今年の芸術の秋は、見事に出るのではないかと思います。
大いに楽しみましょう。

幸田 常一

* * * * *



郡山市の現場で、新築工事をお世話になっておりますが、
あともう少しで完成いたします。

本宮市の現場で、新築工事をさせていただくことになり
ました。

今月より工事を始めさせていただきます。

「ミハノアキ」

この季節は実りの秋、収穫の秋等といわれています。私は毎朝散歩を続けておりますが、この時季の安積野の散歩道は、黄金色一色の水田と秋野菜の瑞々しい緑色、華やかな秋の草花の色を眺め、暑くも寒くもなく、また間近に安積山や安達太良山の山並みを眺めながらの散歩は誠に爽快、身も心も洗われます。毎日元気で散歩が出来る有難さを、しみじみと感じています。

さて、水田を良く観察しますと稗が生えて、稲が作物か、稗が作物か迷う程の水田もあり、肥料のやり過ぎからか倒伏した水田ありと、様々な水田になっております。毎日通る散歩のコースの中に、Nさんの水田があります。今年も稗は1本もなく、倒伏もなく、豊かに実った水田は実に見事なものです。思わず、余りの出来映えに、この水田は農業の神様がお作りになったのではないかと思う程に見事なものです。

1年に3回行われる畔の草刈りも徹底したもので、刈り取った草は、堆肥の原料として畔の1か所に積み上げて、来年の堆肥として水田に活用しています。この作業は、ご主人が草刈り機で刈り取った後、奥様が手で鎌を使って仕上げの仕事をしておられますが、仕上がりは誠に立派であり、畔に雑巾を掛けたと思える程の出来映えです。この様なご夫婦の長年の努力の賜物と理解をしながら、この水田を眺めることが、毎朝の散歩の楽しみの1つにしております。

さて、Nさんの豊かに実った水田を眺めながら、私の子どもの頃、小学校に通学していた際に先生から、

この秋は雨か嵐か知らねども
今日の勤めに田草取るなり

と、教えられたことを思い出しました。

この歌の主旨は、人生何が起こるか将来の予見は不可能である。実りの秋は必ず訪れるが、雨が降り嵐が吹き折角の努力が無駄になるかも知れないが、現在の務めとして田の草取りを一所懸命にすることが大切なことである、と教えられたように思う。

私は後期高齢者の仲間に入れて頂き10年、この教えを忘れずに生きてきた心算ですが…。

この歌は、江戸時代の後期の経世家・農政家・思想家でもある二宮金次郎(尊徳翁)の作と伝えられております(異説あり)。

また私の小学生の頃、小学校の正門わきに二宮金次郎が少年時代に薪を背負い、本を読みながら歩く姿の銅像が建てられていたのを思い出します。全て効率化・合理化が大事とされる現在、この銅像はどのようなになっているのか。遠い昔に姿を消してしまったのではと考え、何か淋しいものを感じる次第です。

k・s記

* * * * *

「 寒露 」

8日は寒露(かんろ)です。
気温がぐんと下がり、寒気で露が冷たくなることを意味します。
山では紅葉が始まりますね。

* * * * *

今月の旬♡食材 「 銀杏 」

銀杏の葉が黄色く色付き、とてもきれいですね。いい季節になりました。風にひらひらと舞う様子も、地面に落ちて黄色い絨毯のようになっているのもきれいでうっとりとしてしまいます。でも、果実のあの強烈な臭いは何と表現したらよいのでしょうか、思わず鼻と口を手で覆ってしまいたくなります。

銀杏には色々な成分が含まれていて、栄養価も高いです。疲労回復や咳止め効果もあるようです。

茶碗蒸しに入れたり、素揚げして塩を少しふって食べてもおいしいですね。昔から、銀杏は一度に沢山食べるもんじゃないといわれていますが、その通りで、おいしいからといって食べ過ぎは絶対によくありません。鼻血が出たり、お腹を壊したりすることもあるようです。

生物（動物）の多様性

生物多様性というタイトルを掲げたが、学術論文を書こうというものではない。日頃植物も動物もよくもこんなに多くの種類があるものだと感心するがゆえに、その一端を覗いてみようという算段である。今回は生物のうち動物についてみてみたい。この中には既に絶滅危惧種になっているものもあり、気になるところである。

さて多様性というからには、生物のうち最も種類の多いものはなんだろう。種類・数からいえば、なんといっても微生物（バクテリア・菌類）であろうが（人間の体内に100兆以上いるという）、目には見えないし、現在分かっているのは千分の1以下というのだから、今回の対象から外したい。動物の分類からいうと、哺乳類が一番種類は少なく、次が爬（は）虫類で、鳥類、魚類と種類が多くなり、そして「昆虫」が群を抜いて一番多くの種類がある。この昆虫を「目の分類項」で見ると、「甲虫目」がカブトムシ、ゴキブリ等で35万種、「チョウ目」がチョウ、ガ等で17万種、「ハエ目」がハエ、カ、アブ等で15万種、「ハチ目」がハチ、アリ等で11万種、「カメムシ目」セミ、カメムシ等で8万2千種、「バッタ目」でバッタ、コオロギ等で2万種、「トンボ目」がトンボで5千種となっている。

「昆虫」の種類は何故多いのか。その主な理由は、あらゆる環境に対応すべく、生態的適応を遂げて種の分化が進み、種類が増えていったといわれる。種の分化には飛翔能力の退化が深く関係しているようである。退化した方が種の分化が進んでいるというわけだ。一方「甲虫目」の昆虫は飛翔能力が他の昆虫に比較して弱く、発見・採集が容易なため種の同定が進んでいるということで、結果種類が多い（全昆虫の40%ほど占める）とのことである。現在もどんどん新種が発見されつつあるということだ。さて「甲虫目」の昆虫にはどんなものがあるか、ご存知だろうか。分かるものを挙げてみると、カブトムシ、クワガタムシ、カミキリムシ、ゲンゴロウ、オサムシ、ホタル、テントウムシ、ゾウムシなどである。この中で、子供に人気のあるカブトムシは意外と種類が少ないのだ。タイリクカブトムシとヤマトカブトムシの外に4亜種があるのみ。タイリクカブトムシが中国大陸に、ヤマトカブトムシが沖縄まで含めた日本に、亜種は沖縄からインドシナ半島に分布する。ご存知のように、夜行性でクヌギなどの樹液を食用にしている。都会のデパートなどでカブトムシが販売されているのを見ると、自然を知らない子どもがかわいそうになる。さてホタルだが、約2千種いるとのこと、そのうち日本で見られるのは40種である。日本での種はゲンジボタルが代表格だ。ホタルといえば夏の風物詩であるが、一時は農薬や排水により汚染して水質が悪化し、ホタルが見られなくなった。最近は水質が改善し、ホタルの餌であるカワニナが増殖してホタルが復活してきているのは幸いである。ホタルは熱帯地方に行くほど種類が多い。変わっている種では、西表島のイリオモテボタルは真冬に発光するということである。そういえば、闇に舞うホタルを見て亡き人の魂の現れとみて偲ぶ和歌があった。

「甲虫目」の次に種類が多いのは「チョウ目」である。そのうち、チョウの種類は17,600種（日本は250種）であり、南極大陸・砂漠の中心部・6千mを超える高山を除いたほぼ全ての陸上環境に生息している。チョウといえば、飛翔する範囲はどの位か、小さい体でそんなに遠くまで飛ばないのではないかと思っているかも知れない。ところが中には、渡り鳥ならぬ「渡りチョウ」がいるのである。例えば「アサギマダラ」というチョウである。調査によれば、夏を過ぎると沖縄や台湾まで渡るというのである。そして春になると日本に戻ってくる。大変な距離を飛翔している。日本ではヒヨドリバナの蜜を求めるといふ。その花を植えてアサギマダラの飛来を待ち望んでいる人達もいるのだ。もうひとつ「渡りチョウ」の例を挙げると「オオカマダラ」というチョウである。飛翔技術に優れ、越冬のためカナダからアメリカ・カルフォルニア州や遠くはメキシコまで渡るのである。渡る集団はすごい数になるということである。不思議なことに、飛来先の宿（森）は

毎年決まっているのだそうで、チョウで埋め尽くされるとのこと。オオカマダラの飛来を歓迎し、祭りを催すところまでである。以上は「渡りチョウ」の話題である。

チョウに関し、是非書きたいことがある。田淵行男（故人）のことである。終戦間際に東京から信州・安曇野に移り住み、登山好きで、北アルプスに登り続け、登山途中で「高山チョウ」と出会い、それに魅せられ、さらには畏敬の念を払いつつ、その生態を写真に撮り続けた。生活の足しにならないのに。奥さんの苦勞はいかばかりであったか。疎開に来たつもりが居座ってしまった。やがて昭和26年、46歳の時「山岳写真集」を出版し、それが評判を呼んだ。その8年後の昭和34年に、ついに高山チョウの生態観察の集大成としての写真集「高山チョウ」を発刊するに至る。日本の高山（1000～3000m）チョウは14種いるが、北アルプスには9種生息している。その写真集には丹念な観察を通しての生態写真が収録されている。学術的にも大きく評価され、現在でも重用されている。その中で北アルプスの最高峰常念岳（2857m）に生息するチョウ「タカネヒカリ」が幼虫で2回越冬するのを突き止めたのである。それまで謎であったのが、田淵によって解明された。高山で夏が短いゆえ、幼虫の生長速度が遅いのであった。また、田淵は470点のチョウの絵（カラーの細密画）を残している。これも又すばらしい。損得抜きで好きでたまらないという人の努力があってこそ「高山チョウの生態」が広く知らされることになったのだ。

次は「トンボ」だが、世界で5千種、日本には200種ほど生息する。トンボはその幼虫期・成虫期に蚊の幼虫・成虫それぞれを捕食するので、益虫でもある。もちろん水辺環境（水質）に敏感である。特に「赤とんぼ」は日本では、古くから「秋津」として親しまれており、童謡にも歌われていたが、近年は余りその姿が見られなくなったのは寂しい。赤とんぼは「アキアカネ」とも呼ばれ（実はナツアカネもあるが）、21種生息する。アキアカネの生態を見ると、繁殖するのは低山地の田や池沼で、5月下旬～6月下旬にかけて夜間に羽化した成虫は朝になると飛び立って水辺を離れ、1～2日草に止まったまま体が十分固まるのを待つ。その後近辺の樹林などに集合して群れとなり、4～5日間を摂餌に費やして、長距離飛翔に必要なエネルギーを蓄える。即ち7～8月の盛夏は山岳地帯に移動して過ごすのである。そして秋雨前線の通過を契機に大群を成して山を降り、平地に移動するのである。これで平地の我々の目にとまるというわけである。夏山登りして赤とんぼを見たのはこういうことだったのだ。

最後に猿について若干触れたい。ご存知のように猿は霊長類で、知能も優れ、感情表現も豊かである。種類としては71種あるということ。そこで猿の体形の大きさであるが、ゴリラやオランウータンは大きく、ニホンザルは普通と思うかも知れない。ところが、体重100g程度で手のひらに乗る大きさの猿がいるのである。もちろん猿の内最小である。その名は「メガネザル」である。夜行性のため、体の割には目が大きい。もちろん樹上で生活する。生息地として有名なのはフィリピンのボホール島だそう。メガネザルの保護地区になっている。生息地としてはその外インドネシアやボルネオの諸島が挙げられる。それにしても「猿智慧」や「猿真似」という慣用句は、人間とサルの知能を比べた言い方だが、豊臣秀吉のあだ名は「サル」だった。褒め言葉のようにも聞こえるが、どうだろう。

<会社近況>

10月に入りました。朝晩の気温が下がり寒くなったなあと感じます。
私は滅多に風邪はひかないのですが、めずらしく風邪をひいてしまいました。
どうやら、主人のをもらってしまったようです。
鼻が詰まって苦しかったり、こんなに出るのかい?というくらい鼻水が出たり
して、主人の鼻風邪は大変強力なものでした。
皆様も、どうかお体大切に…

お世話になっている郡山市の住宅新築工事の現場は、外回りの作業に入りましたので、完成まであともう少しです。
また、本宮市の現場では今月から新築工事が始まります。
現在は樹木の伐採をしている段階なので、実際基礎工事に入るのはもう少し先になります。

夏の暑さも去り、ようやく気持ちよく作業できます。

事務所内では先月から、古くなったカタログや書類などの片付けをしたり、カーペットや天井の貼り替えなどしています。

空いた時間に少しずつやっているのでなかなか進みません。

カタログや書類の他にも、見本品やこまごまとした物が色々出てくるので、もうしばらく時間がかかりそうです。

常に整理整頓を心がけ、仕事がしやすい環境を整えていかなければと反省しています。

★お知らせ★

来月上旬、社員研修のためお休みをいただきます。

ご迷惑をおかけいたしますが、よろしく願いいたします。

11/6 (日) ~ 11/8 (火)

※9日は平常通りです。

*

*

*

*

*

*

平成28年 10月5日発行
有限会社 幸田建設
<発行責任者>幸田久美
〒969-1204
本宮市糠沢字八幡1-1
電話 0243-44-3816

<後記>

暑さも去り過ぎやすくなりましたね。
すっかり秋ですね。お菓子屋さんを覗いても、栗、さつまいも、かぼちゃを使った焼き菓子やまんじゅうがならんでいます。お菓子大好き!(^.^)本当にいい季節です。

事務員ト